

所 陵

No. 79

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



ゆうたんもっこうがん
熊胆木香丸

● 目 次 ●

関西大学博物館所蔵 木村兼葭堂旧蔵の馬形埴輪について	徳田 誠志	2
地震被災時の文化財等の保全と復旧のために	一井 康二	8
関西大学博物館の SP レコードコレクションについて	篠塚 義弘	12
宇奈月温泉探訪—山岡順太郎の故地を訪ねて—	西村 航	14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/>

関西大学博物館所蔵 木村兼葭堂旧蔵の馬形埴輪について

徳田 誠志

はじめに

関西大学博物館が所蔵する考古資料の中核は、明治政府の要職を務めた神田孝平の収集品と、そのコレクションを受け継ぎ、さらに自らの調査によって資料を拡充させた大阪毎日新聞社長本山彦一の収集品からなる。神田が考古品の収集をいつ頃から始めたかについては明らかではないが、『日本大古石器考』を刊行した明治10年代後半には多くの資料が手元にあったと思われる。ところで神田の収集方法は、彼の経歴を見る限り、自らが発掘調査を行ったわけではなく、古物商からの購入や同好の士からの寄贈であったと考えられる。すなわち、神田以前の所有者が存在していたはずであり、彼が集めた考古品の多くが、江戸時代から伝世してきたものに違いない。例えばその1つとして、奈良県島の山古墳から出土したと考えられる鋏形石は、その旧蔵者が木村兼葭堂であることを明らかにしたことがある(徳田1997)。兼葭堂は、改めて説明するまでもなく、近世の浪華にあって「知の巨人」と呼ばれた人物である。

本稿では関大博物館が所蔵する馬形埴輪が、やはり兼葭堂の旧蔵品であることが明らかにな

ったので、まずは速報という形で報告することとしたい。

1. 関西大学博物館所蔵の馬形埴輪について

それではまず、この馬形埴輪について、これまでの報告を参照して観察していきたい(十河1998)。今回紹介する馬形埴輪は頭部から頸部にかけての個体であり、残存している長さは約49cmを測る(写真1)。頭部には轡(右頬に鏡板)や面繫が表現され、頸部には胸繫、手綱の表現があり、頸部の最下端には鞍(前輪)の一部が確認できる。そしてこの馬形埴輪の特徴は面繫や胸繫、さらには鏡板の装飾に円形刺突による文様が多用されている点であることを指摘しておく。後述するように本資料の確実な出土地は不明であるが、この文様の特徴から出土地を類推することが可能になろう。そしてこの埴輪の所属時期は、共伴する遺物が不明であるため、あくまでもこの埴輪の型式編年から導くこととなるが、馬具の表現がやや退化したものであることから、6世紀後半頃とすることが妥当のようである。

さてこの埴輪の出土地であるが、『本山考古



馬形埴輪 右側面



馬形埴輪 左側面

写真1

室目録』では出土地不詳として取り扱われている。その後関大博物館に勤務された角田芳昭氏が、考古学史に詳しい清野謙次氏の示した図に「将門城跡ヨリ出ル」と添書きがあることから、茨城県北相馬郡守谷町（現守谷市）に所在する「将門城跡」から出土したとの考えを示している（角田1997）。

2. 『標有梅』に掲載された馬形埴輪

本節では、清野氏が紹介した絵図を確認していきたい（清野1944）。この図について著作のキャプションでは『聆濤閣帖』所載とあるが、本文には「標（ママ）有梅の図に」とあり、清野氏自身混乱していることが分かる。結果的には本文が正しく、この図は神宮文庫が所蔵する『標有梅』（上）に所収されている図であることを確認した。

それではまず『標有梅』について、やはり先学の研究を参考に見ていくこととしよう（小玉2014）。本書の著者は、大坂南組惣年寄を勤める家柄に生まれた野里四郎左衛門梅園（1784～不明）である。惣年寄という職務の傍ら、彼は狂歌や煎茶道にも造詣が深く、そして古文物に強い関心を示し、いくつかの著作を残している。その代表的な著書が、文政11（1828）年に刊行された『梅園奇勝』である。そして今回紹介する『標有梅』は、この『梅園奇勝』を刊行するにあたって、野里自身が資料収集や自らの勉強のために各書の抜き書きを行った罫紙などを貼り込んだものである。現在は自筆本、転写本を合わせて15冊が次の図書館等に分蔵されている。最も多く所蔵するのが、東京都立中央図書館の加賀文庫（加賀豊三郎旧蔵資料）であり、10冊を所蔵している。そしてこの10冊に続く1冊（『標有梅』11）が西尾市の岩瀬文庫に収蔵されている。岩瀬文庫にはもう1冊落合直澄が書写した1冊が存在している。

さて、清野氏が著書に掲載した馬形埴輪の図は、先述したように神宮文庫が所蔵する『標有梅』（上）に所収されているものである（写真2）。神宮文庫は本書を含め3冊の『標有梅』を所蔵しているが、『同』（下）ともう1冊は太郎館季順による書写本である。この『標有梅』（上）には多くの考古資料が掲載されており、埴輪についても現在の栃木県小山から出土した円筒埴



写真2 『標有梅』（上）所収馬形埴輪図

輪や、千葉県内裏塚古墳から出土した人物形埴輪を掲載している。

それでは、写真2に示した絵図を見ていきたい。右上に「将門城跡ヨリ出ル古代土馬」とあり、左下に「兼葭堂蔵」と記述されている。さらに「土厚サ五分」「サシワタシ凡三尺」、さらに「点ハ皆穴ナリ」との記述も見て取れる。このような書き込みを見ると、野里自身が兼葭堂のもとを訪れ、直接現物を見て描いた可能性も考慮される。ともに大坂に居住していたことを考えれば、十分可能性はあろう。しかしながら兼葭堂は野里がまだ十代の享和2（1802）年に逝去しており、生前に面識があったか否かを確認することはできていない。

さて、写真1の現物と写真2を比較してみる。形や大きさ、さらには刺突による文様の特徴といい同一個体であると判断しても差し支えない。しかし大きな違いを見つけることも容易である。それは「目」である。写真1ではよく分からないかもしれないが、実際の馬形埴輪の目は横長を呈する楕円形に穿孔されている。しかしながらその上半部は欠損しており、写真2のように完全な形では残っていない。もちろん、絵図が描かれた以降に欠損した可能性も考えられるが、割れ口を見る限りでは、近年の欠損は認められない。そうするとこの絵図は、削り抜いて表現された「目」が作られていることを強調するあまり、完形の「目」を描いたという想定をせざるを得ない。

この想定を良とするか、写真1と2を別物と判断するかといわれれば、前者に分があると考

えておきたい。よってこの図を根拠として、この馬形埴輪は木村兼葭堂が所蔵していたと判断するものである。

なお、この馬形埴輪の図は、他に14冊残されている『標有梅』には所収されていないことを確認している。

3. 『聆濤閣集古帖』掲載の絵図について

続いてこの馬形埴輪を描いたと考えられる、もう1枚の絵図を紹介していきたい(写真3)。その図は、現在国立歴史民俗博物館が所蔵する『聆濤閣集古帖』に所収されている。この『聆濤閣集古帖』については数年前より共同研究が行われており、その研究に参加する中でこの図の存在を知ったものである(註1)。

さて、『聆濤閣集古帖』とは、摂津国菟原郡住吉村呉田に居住した豪商吉田家の当主によって編纂された古器物の模写図録である(註2)。吉田家の当主は代々「喜平治」を名乗るが、そのうち道可・拙翁・渚翁の3代にわたって、およそ18世紀の半ばから19世紀後半にかけて収集と編纂が進められたものである。

それではこの『聆濤閣集古帖』の図を、写真1の実物と写真2に示した『標有梅』掲載の図と比較していこう。一見して写真1の馬形埴輪を描いたのものであると判断できるが、写真2の図と異なる点がいくつかある。その1つが先ほども取り上げた馬の「目」である。『聆濤閣集古帖』の図には、削り抜いて表現されている「目」の上部が破損している状況が描かれている。この状況は、現物を忠実に表現しているといつて差し支えない。すなわち『標有梅』所収の絵が描かれた以降に破損した可能性も考えられるが、その他の部分が破損していないことを勘案すると、先に想定したように『標有梅』の図は「目」の存在を明確にするためのデフォルメと考えておきたい。

もう1つの違いは、左頬の口元に鏡板が描かれているか否かである。写真2の口元には鏡板の表現は認められない。その一方、写真3には明らかに鏡板の表現が認められる。それでは現物と比較してみよう。実物の観察でも述べたように鏡板の表現は右頬にのみ認められ、写真1に示したとおり左頬には鏡板や面繫の馬具表現は認められず、剥落している状況である。一方、

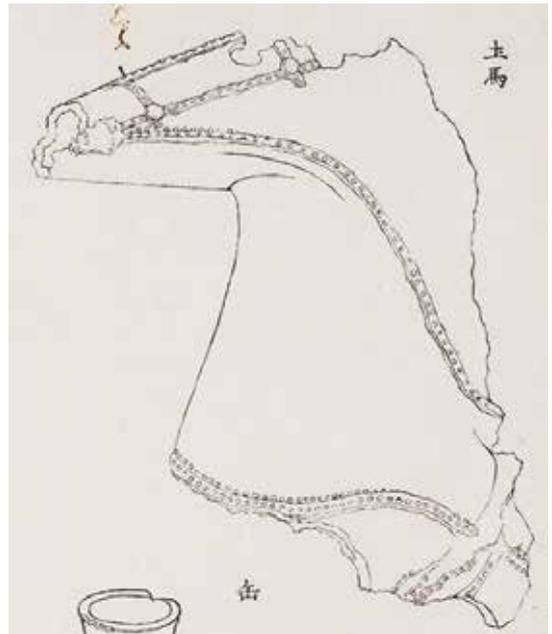


写真3 『聆濤閣集古帖』所収馬形埴輪図

写真1の現物に残る鏡板の形と、写真3の図に描かれた鏡板の表現は全体の形状、さらにはは刺突文様の位置や数までも一致している。すなわち、現物の右頬にある鏡板の表現を、そっくり左頬に転写して描かれていることとなる。このことをどのように理解すればよいのであろうか。写真1と写真3の絵図は別物であるとするか、鏡板が存在していることが理解できるように、敢えて右頬にある鏡板を左頬にあるものとして描いたと考えるかのどちらかであろう。結論を記せば、鏡板が左頬に表現されたことは、この馬形埴輪の特徴を1枚の図で表現するための工夫であり、これもまた一種のデフォルメと判断しておきたい。

このように『標有梅』所収の図と『聆濤閣集古帖』に掲載された図が、微妙に異なっていることについては、当然描いた人物や描かれた時期が異なることが予想できる。しかしながら『標有梅』も『聆濤閣集古帖』も、各冊の作成時期を特定することはできない。先学の研究によれば、神宮文庫が所蔵する『標有梅』(上)は、『梅園奇勝』に掲載される図との共通性が高いと認められることから、両者は比較的近い製作年代が想定されている(小玉2014)。すなわち『梅園奇勝』は文政11(1828)年に刊行されていることからすれば、1820年代には描かれていると考えられる。一方、『聆濤閣集古帖』については、

編纂を始めたとされる初代の道可が享和2(1802)年に逝去しており、すなわち兼葭堂と同年に没している。よって、馬形埴輪の現物そのものが兼葭堂のもとを離れて吉田家に到来した時期は、少なくとも2代目の拙翁(天保3(1832)年没)の時代であると考えられる。兼葭堂の没後、彼の蔵書はそれほど時間を置かず幕府に献納されることとなるが、その他膨大な収集品がどのように解体されていったかについては明らかでない。すなわち兼葭堂から吉田家に馬形埴輪が移動した時期は不明といわざるを得ないが、『聆濤閣集古帖』の編纂時には、出土地や所蔵者(前所有者である兼葭堂)の情報が伝わっていない可能性も考えられる。いずれにせよ吉田家に移動した際に、出土地不詳となったようである。

4. 馬形埴輪の出土地の想定

続いて、この馬形埴輪の出土地を検討していきたい。手がかりは『標有梅』(上)に記されている「将門城跡ヨリ出ル」という情報のみである。結局この埴輪の出土地は、この文章にある「将門城」がどこかということになる。「将門」とはいうまでもなく「平将門」であり、平安時代中期に「新皇」を自称し、東国の独立をめざして天慶2(940)年に「平将門の乱」と称される騒乱を起こした首謀者とされている。この将門が活躍した時代の「城」とは近世城郭とは異なり「砦」のようなものと考えられることから、その場所を特定することが難しい。特に将門は北関東一円に勢力を拡げていたことから、各地に痕跡を残している。

現在、この「将門城」として有力とされる場所が2箇所ある。その1つが茨城県守谷市本町に所在する「守谷城」である。この城は桓武平氏の流れを汲む相馬師常が鎌倉初期に築城したものとされ、相馬氏の先祖が平将門につながるということから、それ以前に将門が築いたとの伝承を持つ。冒頭に紹介した角田氏が、この馬形埴輪の出土地を「茨城県守谷」と想定した根拠は、この城の存在によるものと考えられる。

もう1箇所の有力地は、同じ茨城県の常総市にある向石毛城である。この城は康平5(1062)年に豊田四郎平将基を祖とする豊田氏によって築城されたものであり、遡るとこの地が平将門

の本拠地豊田館跡との伝承が残されている。現地には「平将門公本拠地豊田館」と刻まれた石碑が建っている。

この2箇所が有力な「将門城跡」であるといえるが、どちらが『標有梅』に所収された絵図に記された「将門城跡」であるかを特定することは難しい。しかしながらこの情報から読み取るべきことは、埴輪が将門時代の城跡から出土するはずはなく、むしろ城跡の近くに埴輪が出土するような古墳が所在しているかどうかであろう。もう1点は、江戸時代において将門に関する伝承がその地に残っていることが必要である。

この観点から、2つの城跡を比較していこう。結果としては、守谷城については付近に埴輪が出土するような古墳は知られておらず、常総市の向石毛城には、近在する古墳、しかも埴輪を伴う古墳群が存在している。よって、『標有梅』記された「将門城跡」は、向石毛城と判断するものであるが、この近くに残されている古墳群を見ていきたい。

古墳群の名称は「神子埋(みこのめ)古墳群」であり、常総市篠山神子女に所在する。先述した向石毛城からは、2 kmほど南にある。この古墳群の名称は、「神子」の字を当て「みこ」と読ませているが、「みこ」はそもそも「皇子」の字が当てられるべきものであり、平将門の父良将が桓武天皇の血筋を引くことから、良将を葬った場所を「皇子を葬った場所」として「皇子埋」から「神子埋」へ転じたとされる(石下町1988)。

この神子埋古墳群であるが、鬼怒川右岸の台地上に最大85基からなる古墳群であり、現存する古墳は20数基といわれている。この古墳群の盟主ともいべき古墳が「六所塚古墳(神子埋73号墳)」であり、全長70m、後円部径45m、前方部幅35mを測る。掘削を伴う調査が実施されておらず詳細は不明とされるが、築造時期は古墳時代中期とされている。この古墳に将門の父良将を葬ったという言い伝えが残るが、築造時期からすれば事実とは考えられない。しかしながらこの場所が、古墳群の名称といい、六所塚古墳の被葬者といい、平将門一族の墳墓であるという伝承を色濃く残している土地であるといえよう。この六所塚古墳に埴輪を伴うか否かは不明であるが、町史によれば埴輪を伴う古墳

は古墳群の中に約22基あり、円筒埴輪の他に形象埴輪としては人物、動物がありその中に馬、猪、猿などが存在するという。

また、現地に立てられている「六所塚古墳」の説明板には、「カブキ祭り」といわれる奇祭が享保年間まで続けられていたこと、将門を供養した「キッカブ祭り」として明治時代まで続いていたことが記されている。すなわち、江戸時代においてこの古墳群のある場所と平将門の伝承が深く結びついていたことが確認できる。

以上のことをまとめると、『標有梅』（上）に記されている「将門城跡ヨリ出ル」という情報によってその場所を特定すると、兼葭堂が所蔵した馬形埴輪は、江戸時代の18世紀中頃に、今の茨城県常総市の神子埋古墳群にあるいずれかの古墳から出土したものであると判断できる。すなわち「将門城跡と呼ばれる場所が近くにある古墳群」、「埴輪が出土する古墳群」、「江戸時代に平将門伝説が残る場所」という3つの条件を備えた土地であることは間違いない。

次にこの出土地の推定を補強するために、馬形埴輪そのものの特徴から出土地を考えていくこととする。その方法は本個体の特徴とした「刺突による文様の多用」という特徴から、同じような文様を持つ馬形埴輪を茨城県内で探してみるものである。その結果、現段階ではという条件付きであるが、その一例として茨城県小美玉市上玉里にある玉里舟塚古墳の出土品の中に見つけることができた（忽那2011）。玉里舟塚古墳は霞ヶ浦を望む場所にあり、1960年代に調査され、近年、明治大学に所蔵されてきた埴輪が再整理された。その中に馬形埴輪の破片もあり、接合作業の結果2体の馬形埴輪が復元されている。両個体とも障泥（あおり）や鞍、さらには轡の鏡板部分に兼葭堂所蔵の馬形埴輪と同様の刺突による文様が存在していることを確認した。

玉里舟塚古墳は、神子埋古墳群から直線距離で30kmほど離れた場所であるが、同じ茨城県内にあり、共通した施文方法を採用していることは兼葭堂の馬形埴輪もこの地域で製作されたと考えて矛盾はなかろう。そして埴輪の製作時期も6世紀代と考えられることから同じ時期に位置付けることが可能であり、さらに神子埋古墳群の存続時期とも一致している。玉里舟塚古墳出土埴輪については現物の調査を終えていな

いので、現段階ではこれ以上の言及を控えておき、今後、施文方法の確認と胎土の観察を行い、裏付けの強化を図ることとしたい。

5. 松浦武四郎『己卯記行』の記述

本節ではこの兼葭堂所蔵の馬形埴輪が吉田家を経て、関西大学博物館に至るまでの経緯を見ていきたい。この経緯についての手がかりを残したのが、北海道の名付け親としても名高い松浦武四郎である。武四郎の好古家としての活動については別稿を参照されたいが、明治10（1877）年には『撥雲余興』を刊行するなど、この時期の好古家を代表する一人といって過言ではない（徳田2019）。武四郎は明治期に入ると官職から身を引き、古器物を収集する好古家としての活動に邁進する。そして若い時分から鍛えた並外れた脚力により、全国の好古家と交流する。その中に『聆濤閣集古帖』を編纂していた吉田家も含まれており、明治12（1879）年4月29日に訪問している（松浦武四郎記念館2015）。但しこの時には収集を精力的に行っていた渚翁は死去しており（明治2（1869）年没）、時の主人は亀之助であったと記している。武四郎は吉田家に残されていた様々な古器物を鑑賞し、それぞれの品評を書き残す。例えば石棒などの石器については、「雷斧、雷槌は西国に少き物故是尋常、さして可賞品ならず」と記す。そして勾玉については「可驚は凶する如き碧琅玕の勾玉なり。実に異形と云べし」と自分の所蔵品を思い浮かべながら、正直な感想を述べる。そして「土馬の事を聞しかば、是神田県令にかし置しが、未だ帰されざりし」という記述がある。武四郎は『聆濤閣帖』を見ていたことから、ある程度吉田家の所蔵品を把握していたものと思われ、それゆえ『聆濤閣帖』に掲載されている馬形埴輪に興味を持っており、見たいと思っていたからこそ「馬形埴輪はどこにあるのか」というような質問を發したのであろう。

その回答が、重要である。武四郎の書き残した文章によれば、馬形埴輪は「神田県令」すなわち神田孝平に貸したところ、そのままになっており、返却されていないという内容である。神田が兵庫県令として着任していた時期は、明治4（1871）年から同9（1876）年であり、武四郎が吉田家を訪れた明治12（1879）年にはす

でに東京に引っ越している。この神田に土馬を貸した時期は、当然県令として神戸に在住していた時期であり、吉田家にとっては渚翁が死去してから数年が経過し、亀之助が養子ということもあって、コレクションの管理がややルーズになっていたとも考えられる。すなわち神田が県令を辞職し、東京へ帰任した際に他の荷物といっしょに馬形埴輪も東京へ送られてしまい、そのまま神田のもとに残されたと考えられる。

結局のところ吉田家に馬形埴輪があった時の記録としては、『聆濤閣集古帖』に掲載された図と、この武四郎が残した一文のみである。しかしこの武四郎が残した文章によって、吉田家にあった馬形埴輪が神田孝平のもとに将来し、それが本山彦一を経て関西大学博物館へ収蔵されたという道筋がつながることとなる。

おわりに

現在関西大学博物館が所蔵する馬形埴輪は、江戸時代の18世紀後半に現在の茨城県常総市神子埋古墳群のどこかで出土し、おそらく利根川の水運を通じて江戸にもたらされた。その後、大坂へ運ばれる。これもおそらくは海路を通じて、浪華の津へ陸揚げされたのであろう。そして当代一の文化人であった、木村兼葎堂のもとへ将来する。兼葎堂が逝去した後は、神戸の古器物収集家吉田家のもとへと移動する。明治期に入るとこの馬形埴輪は、神田孝平に貸与され、奇しくも再び関東へ戻ることとなる。そして吉田家も神田も貸与したこと、受けたことを忘却し、神田は明治31（1898）年に死去する。神田の死後もそのまま残されていた馬形埴輪を含むコレクションは、昭和5（1930）年に売りに出され、一括して本山彦一が買い取った（徳田2013）。そして彼の私設博物館である「富民協会農業博物館」の一画に設けられた、「本山考古室」に展示された。さらに本山彦一が逝去した後、このコレクションの整理を担当していた末永雅雄教授を通じて、昭和28（1953）年から順次関西大学へ移管され、現在の博物館へ収蔵され、展示されることとなった。これが、今回明らかにした馬形埴輪の約250年間の軌跡である。

大阪の地にあって130有余年の歴史を持つ本学にとって、「なにわの知の巨人」と称された木村兼葎堂の所蔵品が、幾度もの流転を繰り返

しながら、再び大阪の地に収蔵され、展示されていることの奇縁を大切にしていきたいと考える。さらには、この馬形埴輪について、単に江戸時代からの伝世品というだけではなく、今日的な考古学資料としての調査研究も必要不可欠である。この点は今回の小文では不十分であるので、今後の課題としておきたい。特に、茨城県内出土馬形埴輪との比較研究を進めていくことを誓って、この速報文を擲筆したい。

【註】

註1 国立歴史民俗博物館で実施している共同研究は「『聆濤閣集古帖』の総合資料学的研究」と題し、平成29年度より3カ年かけて実施しているものである。研究代表者は、東京大学史料編纂所の藤原重雄准教授である。

註2 『聆濤閣帖』と題して、所蔵する古器物・古文書の模写を刊本として、吉田家が刊行している。刊行年は明らかでなく、江戸時代末期の文政あるいは天保年間に刊行されたと考えられている。なお、写真3は国立歴史民俗博物館サイト khirin より転載した。歴博では、全帖の高精細画像を Web 公開している。

【文献】

- 石下町1988「神子埋古墳群」『石下町史』第1編 原始・古代 石下町史編纂会 1988年3月
- 角田芳昭1997「編集後記」『阡陵』NO.34 関西大学博物館 平成9年3月30日
- 清野謙次1944「埴輪土馬」『日本人種變遷史』太平洋協会編 小山書店 昭和19年2月
- 忽那敬三2011「玉里舟塚古墳出土馬形埴輪の評価」『ミュージアム・アイズ』第56号 明治大学博物館 2011年3月25日
- 小玉道明2014「野里梅園『標有梅』の世界」『ふびと』第65号 三重大学歴史研究会2014年1月24日
- 十河良和1998「148 馬形埴輪」『博物館資料図録』関西大学博物館 平成10年3月31日
- 徳田誠志1997「関西大学博物館所蔵 旧木村兼葎堂所蔵の鋳形石－奈良県島の山古墳の出土品－」『関西大学博物館紀要』第3号 関西大学博物館 平成9年3月
- 徳田誠志2013「神田孝平から本山彦一へのバトンリレー」『阡陵』NO.66 関西大学博物館 平成25年3月31日
- 徳田誠志2019「静嘉堂文庫所蔵 松浦武四郎旧蔵の鋳形石について」『好古家ネットワークの形成と近代博物館創設に関する学際的研究』Ⅱ 内川隆志編 近代博物館形成史研究会 平成31年2月28日
- 松浦武四郎記念館2015『己卯記行』松浦武四郎 佐藤貞夫編 2015年3月

宮内庁書陵部陵墓調査官

地震被災時の文化財等の保全と復旧のために

一 井 康 二

はじめに

広辞苑によると、博物館とは「考古学資料・美術品・歴史的遺物その他の学術的資料をひろく蒐集・保管し、これを組織的に陳列して公衆に展覧する施設」とある。

本稿では、私の専門である地震工学や防災工学と博物館の関係性について考察する。そして、本稿の読者の多くが博物館関係者であると思われるので、防災工学における先端技術で、博物館の用務に役立ちそうなものをひとつ紹介する。

地震工学・防災工学と博物館の接点

地震工学において、日本は圧倒的に優位な環境にある。その理由の一つは、日本が地震国であり、地震の揺れのデータや（不幸なことに）様々な被害のデータを豊富に得ることができるためである。また、米国西海岸などと異なり、古くから高密度に人が居住していたため、寺社などに歴史地震の記録も残されている。

人が書き残した記録なども博物館の蒐集対象であり、防災工学と博物館の古くからの接点であろう。私は古い字体で書かれた文献を全く読むことができないが、歴史家による取り組み^例（例えば¹⁾）のほかに、工学分野の研究者による文献などから過去の豪雨時の雨量を推し量る試み²⁾がある。

人が書き残したものでなくても、災害に関連した物理現象の痕跡が利用されることも多い。例えば、考古学の発掘の際に地震で地盤が液状化した痕跡が見つかることは多く、これも過去の地震の年代や大きさを推定する資料となる³⁾。また、写真1にみられるような墓石の転倒は、各地の地震の揺れの大きさの推定に役立つため、昔から地震学者や防災関係者に着目されてきた。墓石はきれいな形状をしていて、一般の構造物より、どの程度の揺れで転倒するかという評価が容易であるためである。また、地震直後にすぐ復旧されるものではないとか、復旧されても石材の傷の有無等から被害の有無が

推定できるという利点もある。ただ、1995年以降は耐震補強された墓石も普及しているため、調査においても注意が必要という。

このように、博物館の取り扱う範疇に含まれるような内容が地震工学や防災工学に貢献してきた例はいくつかある。そこで、本稿では、地震工学や防災工学の経験で、何か博物館の取り扱う世界に貢献できるものがないか、検討した。



写真1 墓石の転倒例（2016年熊本地震）

被災文化財等の保全へ、経験の共有を

地震が起きると、博物館の蒐集や保管の対象物も危険にさらされる。このためには、博物館の施設の耐震補強を行っておくことや、美術品等の破損しやすい物品は免振装置のある展示台を利用することが必要である。なお、免振装置には様々なものがある。例えば、鎌倉の長谷の大仏は、地震が来ても台座の上をツルっとすべり、地震の揺れが大仏に伝わらないという免震構造が採用されている。

厄介なのは、2016年の熊本地震で被害を受けた熊本城のような大規模構造物である。2019年のG20では大阪城にエレベーターが設置されたことについての発言があり、物議をかもした。同様の議論は文化財等の耐震補強についても生じ、オリジナルの状況を残しながら、きちんと保全・補強するというのは常に難しい課題となる。

写真2は、熊本地震で被害を受けた（熊本城とは異なる）城郭の一部である。ブルーシー

トにより全面が覆われ、土のうによる重しによって固定されている。このようなブルーシートによる応急措置は災害時に一般的にみられるものであり、被災した文化財等においても同様である。

ブルーシートによる被覆を行う理由は、余震による落石等が周囲に飛び散ることを防ぐだけではない。例えば、写真3は同じく熊本地震により被災した別の文化財の上面であるが、地表面（左側の石列の背後）に亀裂が生じている。このような亀裂からは雨水が浸透しやすくなり、土でできた構造物や斜面は水を含むと重量が増加すると同時に強度が低下するので、壊れやすくなる。つまり、被災した土構造物や斜面のさらなる劣化や変状を防ぐためには、水を侵入させないことが肝要であり、そのためにブルーシートによる被覆が行われる。（なお、写真3の地点は、撮影後にブルーシートによる被覆が行われた。）



写真2 熊本地震で被災した城郭の一部



写真3 地震により生じた地表面の亀裂

なお、ブルーシートによる被覆を行う場合には、重しに用いる土のう袋も含めて、耐久性の

あるものを用いることが望ましい。すなわち、当初は応急措置のつもりでも、結果的に長期間の使用をすることもあるので、紫外線で劣化しにくい材質のものを用いた方がよい。具体的には、ブルーシートは厚手のもの（例えば3000番台以上）、土のう袋も白色より黒色のものが望ましい。また、風によるブルーシートのめくれを防止するために、被覆したブルーシートの端部をしっかりと押さえることが重要である。

実際、2018年の大阪北部地震では、高槻周辺の家屋の屋根に多くの被害が発生し、ブルーシートによる応急復旧が行われた。しかし、地震後の台風21号の被害などもあり、屋根の修理が進捗しないまま、ボロボロになった状態のブルーシートで覆われた家屋が1年以上も散見された。

人生で災害に遭遇する機会はそれほど多くなく、被災経験から得られる教訓は必ずしも共有化されない。しかし、博物館等で文化財等の保全・保護を担当する方には、失われてしまうと2度と戻らない文化財等を守るためにも、ぜひ積極的に災害時の教訓を蒐集していただきたい。

被災・変状した文化財の復旧への写真の利用

どれほど入念に対策をしていたとしても、自然災害による被災を完全に防ぐことはできない。残念ながら被災してしまった文化財等を適切に復旧するためには、被災前の状態がきちんと記録されていなければならない。

近年では、高精度の3次元レーザースキャナが普及し、文化財の詳細な形状を把握・保存することが可能となった。さらには、計測した内容（例えば遺跡の全容）をVRで体験できるアプリなども開発されている⁴⁾。

このようなデジタルアーカイブ化が進めば、万が一の時の文化財等の復旧も容易になると予想できる。また、博物館の「蒐集・保管し、これを組織的に陳列して公衆に展覧する」という使命からしても、デジタルアーカイブ化は積極的に進められるべきである。まあ、デジタルアーカイブ化がすすめば、博物館に行くことなく自宅で展示物を鑑賞できるようになり、博物館の入場者数は減ってしまうのかもしれないが。

しかし、デジタルアーカイブ化のための高精度の3次元レーザースキャナは未だ高価である。すぐに種々の文化財等の形状情報を取得・

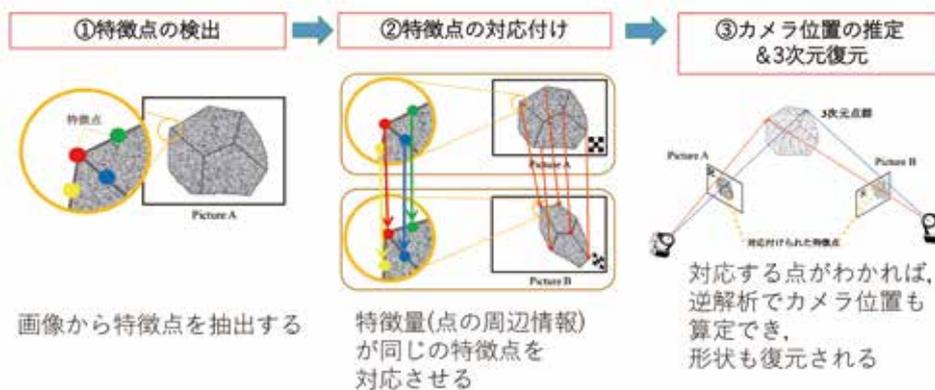


図1 デジタル写真からの形状復元の原理

保存できるわけではない。そこで本稿で提案したいのが、デジタルカメラ画像の利用である。

「ローマは一日にして成らず」という有名な言葉がある。その言葉のもじりで、「ローマが一日でできちゃった、数十万枚のデジタル写真で」とでも訳すべき記事がある⁵⁾。実際、15万枚の旅行者のデジタル写真を統合して、ローマの街並みを再構成できたという内容である。

このデジタル写真の利用技術は、図1のようにまとめられる。すなわち、画像解析の技術により、複数の写真に共通して含まれている対象物を同定することができる。すると、写真内の対象物の位置関係から、撮影時のカメラ位置も逆解析により求めることができ、あとは写真測量の技術の応用で、撮影対象全体の形状を復元できるという理屈である。

実際に、社寺等によくある石垣の形状復元を試みた例を写真4と写真5に示す。写真4は撮影風景であり、通常デジタルカメラ(Nikon COOLPIX P7700)で2 mほど離れた位置から撮影した。撮影画像は写真5に示す12枚である。これを適切なソフトウェアで画像解析することにより、図2に示すように3次元形状を把握することができた。なお、この時のソフトウェアの詳細等は参考文献6)を参照されたい。

この技術を利用した画像解析ソフトウェアは既に何種類か市販されている。著者らは、石垣以外にも種々の対象の形状復元に取り組んでおり、撮影にあたっての留意事項を図3や図4のように取りまとめている⁶⁾。

形状復元の精度は、カメラの性能(画素数)や撮影枚数、撮影距離、画像解析時の条件設定に依存する。しかし、本技術のメリットは、な



写真4 石垣の撮影風景

んといっても、通常デジタルカメラで何枚もの写真をいろいろな角度で撮影しておくだけで済むことである。以前のフィルムカメラと異なり、デジタルカメラでは撮影のコストも撮影後の画像の保存コストも無視できるほどであり、その気になれば明日からでも取り組むことが可能である。

また、ローマの街並みの復元の例のように、過去に第三者によって撮影された画像も利用することができる。つまり、すでに失われた文化財等の復旧にも、写真さえあれば活用できる。

災害はいつ発生するかわからず、文化財等の被災・変状もいつ生じるかわからない。万が一の時のため、可能な範囲でデジタルデータをアーカイブしておくことは重要である。本稿で述べたデジタル写真の利用は、当面の措置の一つとして有効であると思う。

おわりに

本稿では、地震工学や防災工学の分野でも、博物館で取り扱うような考古学の発掘調査、文献資料等が役立ってきたことを述べた。また、

逆に災害時の応急復旧の経験等が、文化財等の被災時の保全にも役立つことを述べた。さらに、先端技術の一つである画像解析技術が、文化財等の形状の記録・保全に有効であり、明日からでも活用が可能であることを述べた。なにかしら、読者のみなさんの業務等のお役に立てば望外の喜びである。

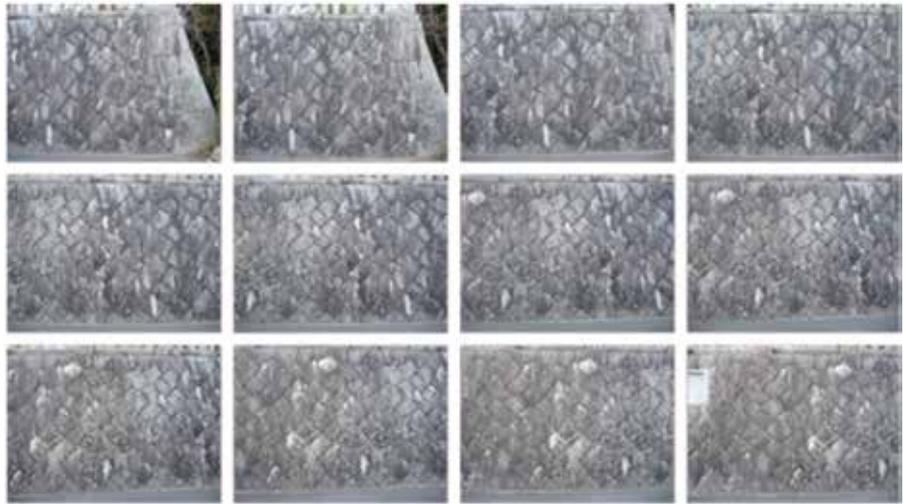


写真5 石垣の撮影画像 (12枚)

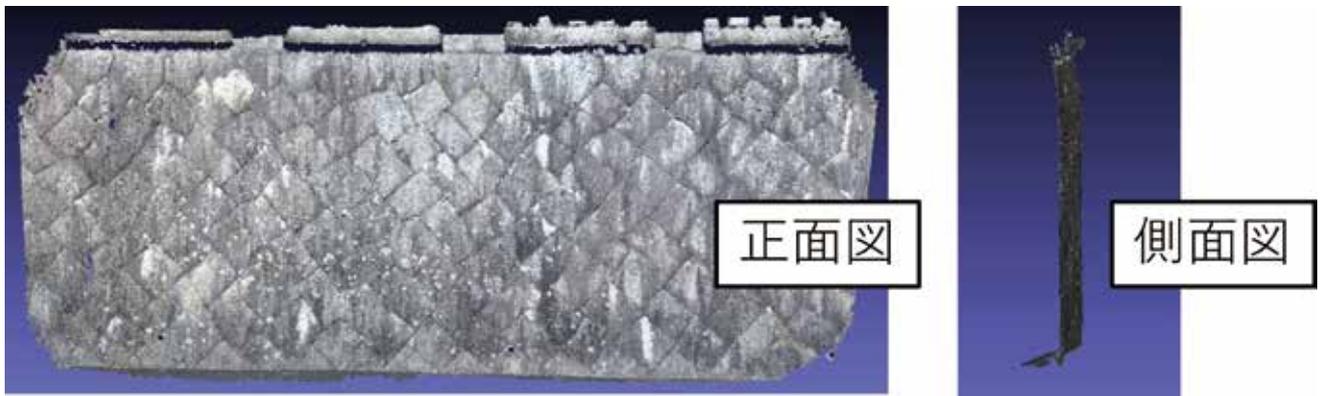


図2 石垣の3次元形状復元結果

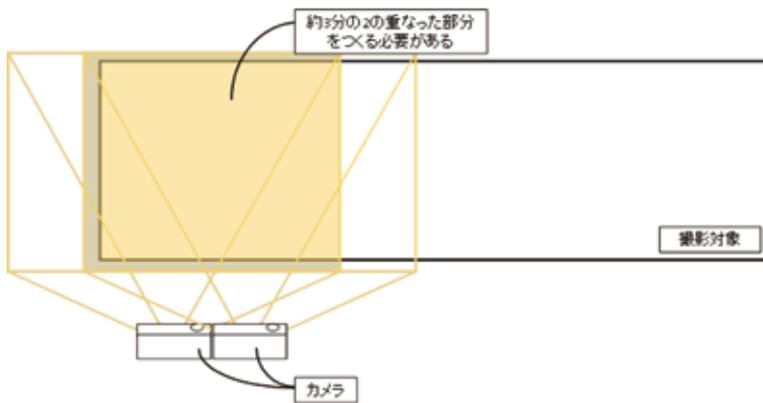


図3 石垣等の形状復元のための撮影条件⁶⁾

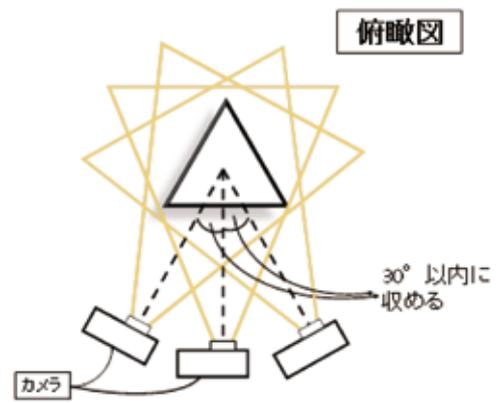


図4 物品等の形状復元のための撮影条件⁶⁾

【参考文献】

- 1) 磯田道史「天災から日本史を読みなおす－先人に学ぶ防災」(中公新書、2014年)
- 2) 庄建治朗, 鎌谷かおる, 富永晃宏「日記天気記録と気象観測データの照合による梅雨期長期変動の検討」(水文・水資源学会誌30(5) 294-306, 2017年)
- 3) 寒川旭「地震考古学—遺跡が語る地震の歴史」(中公新書、1992年)
- 4) Master Works - journey through history in virtual reality - (<http://masterworksvr.com/>) (確認2019年7月29日)

- 5) Hannah Hickey "Rome was built in a day, with hundreds of thousands of digital photos" (<https://www.washington.edu/news/2009/09/15/rome-was-built-in-a-day-with-hundreds-of-thousands-of-digital-photos/>) (確認2019年7月29日)
- 6) 一井康二「写真画像から形状復元した3次元点群データによる建造物の変状把握」JACIC 研究助成報告 (http://www.jacic.or.jp/josei/pdf/2014_01.pdf) (確認2019年7月29日)

博物館運営委員 社会安全学部教授

関西大学博物館の SP レコードコレクションについて

篠塚 義弘

1 はじめに

関西大学博物館では、2016年度から「蓄音機で聴く SP レコード演奏会」を毎年10回程度開催している。演奏会では主に昭和初期に日本で発売された西洋クラシックの SP レコードを用いている。筆者はこの演奏会に当初から関わり、2017年度からは SP レコードの管理と演奏会の企画運営を担当している。2018年度には SP レコードコレクション・データベースの再整備を行ったので、本学博物館が保有するコレクションの概要と整備状況について報告する。

2 SP レコードコレクション所蔵の経緯

本学博物館が SP レコードを保有するようになったのは比較的新しい。きっかけは本学の教育後援会を介して大阪の上野製薬様から2007年度に上野コレクションとしてレコード約1,500枚(SPレコード約1,300枚、LPレコード約200枚)



2019.7.10 SPレコードコンサート風景
(関西大学 KU シンフォニーホール)

の寄贈申し出を受けたことから始まる。しかし、その活用は初年度に学外から講師を招いて演奏会を1回開催したのみであった。その後しばらくして、かんさい・大学ミュージアムネットワークを通じて本学は、大阪芸術大学、大阪音楽大学などと交流を深めた。特に大阪芸術大学博物館の柳知明事務長(当時)からのアドバイスなどを受けて、2015年度末に蓄音機(HMV-193)を購入した。ここでいう蓄音機とは、駆動と再生・増幅機構に電気を一切使わないゼンマイで駆動する再生専用の機械式蓄音機のことである。この蓄音機を用いて2016年度から前述の演奏会を博物館特別展示室で開催し始めた。

2017年度には大阪音楽大学から大量の SP レコード(松本コレクション)を譲り受けた。2017年度に元衆議院議長の伊吹文明氏から伊吹コレクションとしてレコード約460枚(SPレコード約400枚、LPレコード約60枚)の寄贈話をもたらされ、さらに2018年度には、本学教育後援会の有志の方からアウトサイドホーン型蓄音機(Victor IV型 Type M、1909年製)の寄贈があった。この他にも、篤志家の方達から SP レコードを寄贈いただくことが増え、現在に至っている。

演奏会場の博物館特別展示室がある簡文館は、1928(昭和3)年に本学が図書館専用として建設した建物で、千里山キャンパスで現存する一番古い建造物でもある。2018年度には大阪府指定文化財(建造物)に指定された。また、所蔵した蓄音機イギリス・グラモフォン社の HMV-193は、1928年製である。SPレコードもほぼ同じ時代である昭和1桁の年代に製作されたものがほとんどである。つまり、今から約90~100年前の音をその当時の建物と蓄音機で再生して聴くことができるのである。視聴者の方々から、SPレコード演奏は、音色が優しい、癒やされるなどエモーショナルな感想をよく聞かすが、本館の特長が大いに影響していると思われる。

3 データベースの整備

当館では2017年度に伊吹コレクションの手書きリストをEXCELで入力した。上野コレクションのリスト化は完了していたが、レコードB面やアルバム収録の曲名が不明であるなど、データベース整備の必要性があった。そこで、西洋クラシックのコレクションをより使いやすく、わかり易くするために、2018年度に上野コレクションを中心に伊吹コレクションも含めたSPレコード・データベースの整備を行った。

今回の整備方針は、以下の通りである。

○両コレクション共通

- ・レコードレーベルをスキャンし画像DB化
- ・マトリックス番号（刻印番号）の収集
- ・誤記修正及び表記の統一化
- ・同一レコードの発見

○上野コレクション

- ・B面及びアルバム収録データの収集
- ・アルバム内の全レコード番号の収集
- ・レコード番号とアルバム番号の混在を整理
- ・作曲者名などのカタカナ表記を追加

4 コレクションの構成

西洋クラシックのみであるが、上野・伊吹両コレクションのアルバム構成枚数、作曲者名及び演奏形態（ジャンル）について集計した。

上野コレクションの構成は、アルバム2枚組から8枚組まで214組912枚と、シングル403枚の計1,315枚である。伊吹コレクションでは、アルバム2枚組から9枚組まで55組195枚とシングル129枚の計324枚である。

両コレクションともバロック音楽から古典派、ロマン派などほぼ全時代の作曲者作品を網羅して収集していることが判明した。コレクション間の時代別構成比率もほぼ同様であった。なお、演奏形態では、上野コレクションは協奏曲が、伊吹コレクションは歌曲・声楽曲がやや多いこともわかった。

5 データベース整備の効果

コレクション・データベースを整備したことにより、コレクション共通として①検索・試聴が容易となった、②マトリックス番号により、海外のディスコグラフィ（検索データベース）での音源の収録年月日の検索可能性が大幅に向

上した、などの効果があった。上野コレクションでは①B面及びアルバム内の曲名が判明した、②シングルに同一レコードがあることを一部で認識していたが、この他にも同一レコードを発見し、同一アルバムも8組あることが判明した、③アルバム内のレコードもレコード番号で1枚ずつ検索が可能となった、などの効果があり、SPレコード演奏会を実施する上で大いに役立っている。また、作曲者名などのカタカナ表記を追加することで、将来的にデータベースを公開した時に、初心者でも検索しやすくなる。

6 今後の課題

上野コレクション、伊吹コレクションの構成とデータベース整備の概要について簡単に述べてきたが、両コレクションに関して、さらに以下の整備が必要である。

- ・発売当時と現在までの調査・研究で判明している相違点の調査と注記
- ・コレクション間の整合性を図る（演奏形態の表記統一、コレクション間の重複レコードチェック）
- ・レコードの保存環境及び収納方法の見直し
- ・伊吹コレクションの邦楽レコードのデータベース化

今後もデータベースを整備・充実させてSPレコード演奏会に役立てていきたい。

謝辞：本学に最初にSPレコード寄贈の仲介をして頂いた教育後援会と森本靖一郎理事長（当時）、そして柳知明氏（元大阪芸術大学博物館事務長）にはSPレコード及び蓄音機に関して専門的なアドバイスを頂きました。記して感謝いたします。

参考：「レコードの世界史：SPからCDまで」音楽之友社 1986.2 岡 俊雄著
「レコード百科—歴史から鑑賞まで—」誠文堂新光社 1981.6 宮本英世著

学術情報事務局参与・学芸員

宇奈月温泉探訪 —山岡順太郎の故地を訪ねて—

西 村 航

富山県黒部市の宇奈月温泉は1923（大正12）年に開湯した温泉地で、黒部川水系の電源開発を背景に形成された。筆者は本年春に宇奈月温泉を訪れ、ここに残る関西大学中興の祖・山岡順太郎の足跡を辿った。

宇奈月温泉と山岡順太郎

山岡順太郎は1866（慶応2）年に金沢で生まれた。茨城県吏、逓信省勤務を経て大阪商船株式会社に入社し、実業家としての手腕を磨くと1914（大正3）年には株式会社大阪鉄工所の社長に迎えられる。やがて1917（大正6）年、大阪商業会議所の第8代会頭に就任して名実ともに大阪財界の重鎮となった。

宇奈月との関わりは、彼が1919（大正8）年に設立し社長を務めた日本電力株式会社（以下「日電」）の事業に由来する。黒部峡谷ではすでに東洋アルミナム株式会社が電源開発を展開していたが、日電が1923（大正12）年に事業を引き継ぎ、電源開発と温泉街建設を担った。これにより山岡は黒部と深く関わることになる。



写真1 独楽荘（中央の人物が山岡順太郎）

なお山岡が関西大学の経営に加わったのは1920（大正9）年からであり、日電経営の時期と重なる。関西大学は1922（大正11）年総理事となった山岡の尽力により旧制大学への昇格、千里山への学舎移転を実現した。彼が「学理と実際の調和」などを説いて提唱した理念「学の実化」は、今日まで続く学是となっている。

独楽荘

さて、筆者はまず「独楽荘」の碑を訪れた。これは山岡が晩年に構えた別荘「独楽荘」敷地内に建立された



写真2 独楽荘の碑

もので、裏には以下のように刻まれている。

日本電力株式会社ハ山岡順太郎ノ創立ニ係リ専ラ中部日本ニ於ケル水力電気ノ開発ヲ使命トナス而シテ同社ノ有スル発電地点ハ富山岐阜両県ノ諸川ニ亘リ頗ル豊富ナリト雖黒部川ハ其尤ナルモノナリ大正拾参年壹月翁社長トシテ親シク之カ起工式ニ臨ミ此地水力無限ニシテ産業動力ノ宝庫タルト共ニ地形雄渾ニシテ心身涵養ノ神境タリトシ推賞措カス乃昭和貳年六月一墅ヲ建テ司馬温公ノ故事ニ因ミ名ケテ独楽荘トナス高瀨幽閑自ラ翁ノ風格ヲ偲ハシムルモノアリ茲ニ翁ト事業ヲ与ニシ其徳望ヲ敬仰スル者還暦ノ寿ヲ祝福スルノ機ニ於テ翁カ愛賞ノ地ニ碑石ヲ建立シ以テ記念ス

昭和参年九月拾八日

日本電力株式会社副社長 池尾芳蔵識

文中では、独楽荘の名が司馬温公の故事、すなわち北宋の司馬光（1019-1086年）「独楽園記」に由来すること、山岡を敬仰する人びとが碑を建てたことが記される。

1927（昭和2）年6月に落成した独楽荘は当初、現在の碑から北



写真3 独楽荘碑文

西に300メートル足らずの黒部川沿いに建てられていた。今日の「黒部・宇奈月温泉やまのは」付近にあたる。当時は鉄道沿線周辺だけでなく川沿いにも旅館が建設されていく時期であり、独楽荘の立地も黒部峡谷の明媚な眺望を求めて選定されたのだろう。鹿子木彦三郎の『山岡順太郎伝』(1929年)によれば敷地は「黒部の峡谷を俯視し、背には杉が轟々として生い茂」っていた。邸内に設けられた浴室には温泉が溢れ、溪声が届いたといい、腎臓病を患った晩年の山岡にとって良い静養の地だったことがうかがえる。

その後の具体的な経過は明らかでないが、1928(昭和3)年に山岡が亡くなると独楽荘は日電の寮、温泉旅館として利用された。1946(昭和21)年の大火で宇奈月温泉街の大部分が焼失した際は、類焼を免れ、町内から被害者15名を受け入れた。ただし独楽荘を囲んでいた木々が焼かれてしまい、1958(昭和33)年時点で建物がむき出しの状態にあったことが山岡没後30年の関係者追憶会で語られている(『故山岡順太郎翁追憶会の記』私家版)。

大火の後宇奈月温泉の再興が始まると順太郎の孫である康が経営者に就き、独楽荘を温泉旅館として活用し営業を始めた。『日本観光旅館連盟会員旅館案内』(旅館新聞社、1964年)では独楽荘が和室18室を備え、一般客75人、団体客90人を収容人数とする旅館として紹介されている。

廃業後、1976(昭和51)年10月に石碑のみ現在の場所に移され、記念碑として保存されるとともに周辺が「独楽園」として整備された。隣には日電の宇奈月事務所を復元した黒部川電気記念館が建ち(1987年開館)、温泉と電源開発の歩みに触れられる一帯となっている。



写真4 宇奈月神社

宇奈月神社

温泉街の南東部に位置する宇奈月神社には、山岡の揮毫、奉納による石柱が残る。大正末に温泉街が発展し人口増加するなかで、神社の創建は居住者の念願であり、在地企業の賛同のもと1927(昭和2)年10月2日に実現した。

石柱は創建時に奉納されたもので、山岡が号していた「独楽荘主人」の刻銘が残る。ここに、黒部川の電源開発と宇奈月温泉街建設を背負っていた日電社長としての、同地における山岡の位置づけが読み取れる。



図5 宇奈月神社の石柱

最後に地名である「宇奈月」と山岡との関係について触れておかねばならない。町の伝承によれば、開湯以前にあった「うなずき」の地名に字を当てたのが山岡と山田胖(黒薙から宇奈月への引湯を指揮した東洋アルミナム技師)である。ある晩、ふたりが湯のなかで温泉の名を相談した折、宇治や奈良に並ぶ観月の地にしたいという願いで「宇奈月」と名付けたのだという。

今回の宇奈月訪問は山岡の足跡の一端を辿ったものにすぎないが、これだけでも山岡の事績の重みがうかがえる。同時期に関西大学では大学昇格を実現させて学理と実際の調和を説き、また国内規模で電力需要の増加に応えんと務めた山岡は、卓識を備え時代の趨勢を見極めた俊傑であったといえよう。

写真出典

写真1 鹿子木彦三郎『山岡順太郎伝』
写真2～5 筆者撮影(2019年4月22日)

主要参考文献

『宇奈月町史』宇奈月町役場、1969年。
『追録 宇奈月町史 文化編』宇奈月町役場、1989年。

関西大学博物館 年史編纂室学芸員

◆ 博物館だより

◇2018年度関西大学博物館 開館日数・入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	26	25	23	24	5	20	26	25	21	19	16	16	246
入館者数	1,567	2,153	863	1,156	2,952	681	451	808	807	258	263	421	12,380

◇4月1日から5月19日まで、2019年度春季企画展「高札をみる、よむ」を開催し、2,832名の方にご来場いただきました。5月11日に開催した講演会「高札から読み解く近世社会」（講師 坂井市みくに龍翔館学芸員 上原康生氏・本館学芸員 佐藤健太郎氏）では、31名の皆さんにご参加いただき、本館学芸員による展示解説も行いました。



◇今年度も資料の取扱いを実践的に学ぶ「博物館実習実践研修会」を開催しました。河内國平氏・河内晋平氏による日本刀研修（6月22日）、小畑弘己氏（熊本大学）による土器圧痕研修（6月29日）を実施し、2回の講座で合わせて55名の方が参加されました。

◇夏季企画展として本学と法政大学・明治大学による三大学連携協力協定締結記念特別展示「ボアソナードとその教え子たち」を6月1日から7月20日まで開催しました。6月15日にはシンポジウムも開催し、会期中には1,275名の方にご来場いただきました。

◇百舌鳥・古市古墳群が世界文化遺産に登録されたことを記念し、堺市と関西大学との地域連携事業の一環として7月15日に本学100周年記念会館にてシンポジウム「世界文化遺産へのあゆみ 百舌鳥・古市古墳群と関西大学」を開催し、660名の申込み（参加者600名）を得ました。参加者たちは、講師の話をも熱心に聞き入っていました。7月28日には東京でも開催し、多くの方にご参加いただきました。

◇連携講座「蓄音機で聴く SPレコードコンサート 音のあるくらし」を7月10日に開催しました。当日は、本館と大阪芸術大学所蔵の3種類の蓄音機を使ってSPレコードを演奏しました。参加された110名の皆さんは会場全体に広がった蓄音機の優しい音色に耳を傾けていました。

◇今年度も夏の恒例行事「キッズミュージアム」を7月30日（書道教室）と8月6日・7日に実施しました。多彩な体験型プログラムに参加した子供たちは目を輝かせて夢中で楽しんでいる様子でした。小学生を中心に3日間で2,100名に参加いただき、大賑わいのイベントとなりました。



◇このたび、書家山本竟山由来の書画や手紙類、篆刻など615点を、御遺族山本宗生氏よりご寄贈いただきました。遠山慶一氏より伊予松山藩の武家出身である書家遠山旭溪の書と落款印石、江戸時代の染付磁器碗の合計10点を、同じく本学校友の故徳山喜昭氏の奥様である徳山多美氏から、徳山氏が収集された高札、看板、絵馬や鑑札などの木札、米切手、矢立など合計821点と書籍や紙資料などを寄贈していただきました。また、河内國平刀匠を介し、山岸良助氏、関きよ氏、山岸稔良氏からは短刀・小太刀・刀子など合計7本をご寄贈いただきました。本学校友で名誉教授である北嶋弘一氏からは、蓄音機1点及びSPレコード25点の合計26点の寄贈をいただきました。今後、博物館で充分活用していきたいと考えています。

．．． 編集後記 ．．．

表紙は、今年度徳山多美氏より寄贈いただいた熊胆木香丸^{ゆうたんもっこうがん}の江戸時代末期から明治時代初期頃に作られた木製看板です。本看板は、腹に「はらいのくすり」と書かれた黒鬼が熊胆木香丸と刻まれた金棒を持って仁王立ちしている様子を造形していることから、健胃薬の「熊胆木香丸」を飲めば「鬼に金棒」でたちまち「腹痛」が治るという効果を謳っているのでしょう。頭部に吊金具があり、薬店で掛けられていたことがわかります。

9月1日から7日まで開催されたICOM（国際博物館会議）京都大会に、本館学芸員が参加しました。本大会は「文化をつなぐミュージアム」をテーマとしており、基調講演や様々な分野の国際委員会によるセッション、企業や博物館園が出展する展示会をとおして、国際的な視点から博物館の現状について見識を深めることができました。

